
願い事はプリズナー

伊東吉影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願い事はプリズナー

【Nコード】

N8367U

【作者名】

伊東吉影

【あらすじ】

舞台は失業率15%を超えた現代日本。福島県福島市の大学に通う大学一年生の鞘多さやたは、先行きの見えない未来に不安を感じ、銀行強盗をやつてのけて「刑務所暮らし」をすることを考え付く。刑務所に入れば本は読めるし、食事は食べられるし、運動だって出来るからだ。

鞘多は、半ば強引に、同学年で友人の藤村と、藤村の恋人である貧乳女子学生・泉の二人を引き連れ、地元の銀行に颯爽と乗り込んだ。そして、ハンドガンの銃口を天井に向けて鞘多が叫ぶ。

「全員、動くなッ！」

この一言から後に、鞘多も予想外の、日本中を巻き込んだとんでもない事件が幕を開けた。

序章：食堂の三人（前書き）

この物語の登場人物・国・組織・団体名は全て架空の存在なのであ
しからず。

序章：食堂の三人

「決めたぜ、藤村」

「何？」

「俺、刑務所に入る」

大学の食堂内に、藤村の悪友・鞘多さやたの声が響き渡る。

食堂の時計は13時30分を回ったところだった。この時間にはすでに大半の学生が授業やらサークルやらに勤いそしんでおり、食堂内にはおらず、閑散としていた。

食堂のおばさん達は、とつくに昼過ぎだというのにいつまでたつても帰ろうとせず、なにやら物騒な単語を吐き出す男子学生を訝いぶかしんだ目で見ていたが、すぐに顔をそらして食器洗いに没頭し始めた。

「・・・なにそれ」

「それ、マジで言ってるの？」

茶色いテーブルを挟んで鞘多と向かい合って座っている男子学生・藤村と、藤村の恋人・泉は目を丸くして答えた。

「マジマジ、大マジよお二人さん。俺は犯罪を犯して刑務所に入ることになりました」

鞘多はそういうと、小ぶりの湯飲みに入っていた飲みかけの麦茶をぐいっと一気に喉に流し込んだ。

「いや、まさかあの真面目一直線の鞘多が、こんな面白い冗談を言うとはなあ、泉」

「ほんと、ついに脳みそにカビが生えたのかな？」

「おい、お前ら」

カツン、と、小気味いい音を立てて湯飲みをテーブルに置いた鞘多は、腕を組み、神妙な顔つきになった。

至極真面目な話をするときの鞘多の癖だった。

太い眉はV字型につりあがり、眉間には無数の皺しわが寄っていた。

「おいおい、『お岩様』モードになって・・・本気か？」

藤村がちやかす。が、鞘多は意にも止めない。

「お前たち、この日本が今、どれだけ危機的な状況にあるかわかるか？」

「危機的な状況？」

泉が首をかしげて尋ねる。

「そう、例えば、この国の失業率が今いくつかわかってるか？」

「あー・・・たしか15%だっけ？この前ニュースでやってたな」

「正確には、15.8%だ。これって、すんごくヤバい数字だ」

「そうなのか？」

藤村の問いに、鞘多は静かに頷く。

「当然ヤバい数字だ。戦後最悪の数字だ。それだけじゃあない。去年の春に卒業した全国の大学生のうち、進学も就職もしなかった、所謂『就活浪人生』が何人いるかわかってるか？」

鞘多の問いかけに、うーんと頭を人差し指でつつきながら、藤村が考える。

「確か、30万人くらいじゃなかった？」

口を割ったのは藤村ではなく、泉だった。

物知りの泉に感心する一方で、30万という数字が多いのか少ないのか、藤村には皆目見当がつかなかった。

泉の答えに、満足そうな顔を浮かべる鞘多は、話を続けた。

「良く知ってるな泉。そう、今全国では30万人の若者が先の見えない未来に対して孤独と絶望を感じているってわけだ」

「まあ、若者に限らなければ、失業して路頭に迷っている人なんてその何倍もいるんだろうけどね」

「そう。だが、こういった失業の問題だけじゃない。相次いで倒産する企業。政治家の汚職。隣国との外交問題。さらには地震などの自然災害による被害。モンスターペアレント。著作権違法問題。子供の虐待。自殺者の増加。藤村の母親が離婚してキャバクラで働いていること。泉の胸がなかなか成長しないこと。この国は様々な問題を抱えている」

「ちょっと待て！最後の二つはウケ狙いか！？てか俺の親の離婚と母親のキャバクラでのパートは関係ないだろーが！」

「鞘多君、貧乳をバ力にする者は貧乳に泣くよ」

「いやその突っ込みおかしいだろ！」

「とにかく！この国は様々な問題を抱えている一方で、政府はそのことに対して何一つ有効な対策を提示していない！」

「強引に話を進めるなよ・・・」

お岩様モードになった鞘多は、良くも悪くも強引に話を進めてしまふある種の「癖」があつた。

彼の強引な話に辟易した藤村は、さつさとこの話を切り上げたいと願つた。

・・・願つても、鞘多の話は続くわけだが。

「で、その話と鞘多君がムシヨに入るのと何が関係してるの？」

泉の問いに、鞘多はわざとらしく、はあくため息を付いた。

「泉、勘の悪さが藤村から移つたんじゃないか？」

「おいこの岩野郎」

「うゝん・・・そうなのかな・・・？」

「考え込むなよ泉・・・」

自分が惨めに思えてきた藤村はさつさと席を立とうとしたが、鞘多の次の言葉に耳を疑つた。

「実はな、銀行強盗をやろうと思っている」

「・・・は？」

「・・・え？」

藤村と泉は、頓狂な声とんきやうを上げて、鞘多を見つめた。

鞘多は依然、真剣な顔つきのままだつた。

序章：食堂の三人（後書き）

初めまして、伊藤吉影という者です。

今回、初めて小説を投稿させていただきます。

更新頻度は・・・ちよくちよく更新していきたいと思っています。

第一章：決行前夜

「銀行強盗だあ？」

鞘多の発言に、藤村は思わず大声を上げた。

思わずはっとして辺りを見やるが、食堂のおばさんたちは黙々と皿洗いに従事しており、こちらの様子など意にも止めていないようだった。

「そんな大声出すなよ、まあ座れ」

「いやお前が変なこと言うから・・・」

「ねえ、それって本気なの？」

席に座った藤村の横で、泉が前のめりになって問いただす。

「本気さ。決行は明日の金曜日。俺は銀行強盗をやって警察に捕まる。その後はスムーズに起訴と裁判をちゃちゃっとやってもらって、めでたくムシヨ入りってわけだ」

ペラペラと今後の予定を語る鞘多を、藤村は怪訝な目で見つめる。

「なんでそこまでして刑務所に入りたいんだよ。いや、てか、なんでもそも銀行強盗？」

「刑務所に入れば、毎日三食の飯が食えるし、本は読めるし、刑務所仲間と運動も出来るだろ？」

「え・・・」

絶句した藤村を余所に、鞘多は、ふう、と一息つき、話を続ける。

「俺さ、正直怖いんだよ。問題山積みのこの国で、『安心安全』な生活を送れるのかどうか、わからなくなってきたんだ。・・・正直、自殺を考えたこともあったさ」

「・・・本当かよ」

「ああ。でも、自殺なんてよくよく考えたらバカバカしく思えてきてな。で、『どうやったら確実に飯が食えて、安全に生きていけるのか』ってのを考えた結果、囚人になって飯を食っていくのが一番楽だろうなって考えたのさ」

「その考えも相当バカバカしいんじゃないのか？どーなってるんだよ
お前の思考回路は。大体、刑務所の食事ってまずいんだろ？良く知
らないけど」

「いや、最近は衛生面もしっかりして、そこそこ良い飯にありつけ
るみたいなんだよ」

「どこ情報だよそれ」

「・・・ねえ、なんで銀行強盗なの？」

泉の質問に、鞘多は少し照れたような顔を浮かべ、角刈りの頭をポ
リポリと掻く。

「お岩様」モードは、すでに解除されていた。

「いやあ、やつぱ目立つじゃないか、銀行強盗ってさ。日本中で大
々的に取り上げられるじゃないか。どうせ犯罪やるならド派手なこ
とをやってやろうと思ってなあ」

あははは、と笑い声を上げて鞘多が言う。

こいつ、完全にイカれてやがる。と藤村は心の中で思い、同時に、
こんな馬鹿話にいつまでも付き合ってる暇はないと思った。

付き合うだけ、時間の無駄だ。

「お、おい、どこ行くんだよ」

席を立った藤村に、鞘多が声を掛ける。

鞘多の方を振り向き、藤村が冷たく付き放つように声を出した。

「帰るんだよ。お前のアホらしい話に付き合うのはもうウンザリだ。
小学校の頃からずーっと思ってが、なんでそんなアホらしいことを
やろうとするんだよ。ちよっとは頭を冷やせ」

「おい、俺は真剣なんだぞ！」

「行こう、泉。こんな奴の話に付き合う必要はない」

「う、うん・・・」

「あ、おいちよっと！まだ話は終わって・・・おい！藤村ー！泉
ー！」

鞘多の大声を背中で受け止めながら、藤村と泉は食堂を後にした。

その日の夜

寝間着に着替えて、自宅でくつろんでいた藤村の携帯に着信がかかってきた。

時刻は22時40分。こんな時間に誰からだろうと思い、携帯の画面を見ると、『さやたふみなり鞘多史也』の文字が表示されていた。

藤村の脳裏に、今日の昼間に食堂で鞘多が放った一言が浮かぶ

『銀行強盗をする』

どうせ、その銀行強盗の話の続きをしたいのだろうと思った藤村は無視を決め込んだのだが、いつまでたっても電話が鳴りやまないことに苛立ち、渋々電話に出ることにした。

『もしもし？』

『おお！ やつと出たなこの野郎。実はさ、今日の食堂での話の続きなんだけど』

それ見たことか、予感的中。

藤村は間髪入れずに答えた。

『切るぞ』

『あー！ おい！ ちよつちよつ！ 待て！ 切るな！ すぐに終わる話だから！』

『・・・なんだよ』

むすつとした声で藤村が答える。

『実はさ、明日の銀行襲撃の際にちよつと手伝ってほしいことがあるんだ』

『まさか、一緒に銀行を襲えとか言っんじゃないだろうな』

『いやいや、実行するのは俺だけだ。お前を巻き込んだりなんかしないよ』

手伝いを要請してきてる時点で十分巻き込んでるんじゃないか。と藤村は思ったが、言うだけ無駄だと思ったので口には出さなかった。

『実はさ、明日の俺の勇姿を、ビデオカメラに収めて欲しいんだ』

『は？』

『ああ、悪い。手順を話してなかったな。つまりだな、明日俺が銀行を襲うだろ？で、予定では客と行員を人質にとつて、丸一日銀行内に籠城するんだ。お前にはその人質の一人になつてもらつて、中でビデオカメラを廻して俺の勇姿を撮影して欲しいんだ』

『巻き込む気満々じゃねーか！なんだよそれ人質つて！そんな危険なこと出来るか！』

藤村の携帯を持つ右手に、自然と力が入る。

が、そんな藤村の怒声を聞いても、鞘多はどこか余裕を感じさせる声で続けた。

『大丈夫だ。危険な仕事じゃない。それとも、断る気か？』

『当然だ。お前のお遊びにこれ以上付き合つてられない』

『へえ……』

『……なんだよ』

『泉は承諾してくれたんだけど……』

『は？』

藤村が頓狂な声を上げる。

どうしてそこで泉の話が出てくるのだ。いや、そもそも泉も一緒に行くのだろうか？

頭がどうにかなりそうだったが、そんな馬鹿な話はあるまいと藤村は思い、一旦電話を切ると、泉に電話をかけた。

二回の着信音の後、泉が電話に出た。

『あ、藤村君。どうしたの？』

『あんな、泉。お前、鞘多の銀行強盗の話に乗ったって本当か？』

『それって、ビデオカメラのこと？』

『ああ』

『うん、乗ったよ』

『いや、乗ったよつてお前……』

予想外の返答に、思わず声を詰まらせる。

『なんであんな奴の話に乗るんだよ！適当に無視しておけばいいだろ？どーせ冗談で言ってるんだろっし』

『・・・藤村君、冗談だと思う？』

『え？』

『今日の食堂の話を聞いてる限り、鞘多君、たぶん本気だと思うんだけど』

『いやいや、そんなわけないだろ。どうせいつもの戯言だよ』

『うーん・・・でも、私はそうは思わないんだよね』

泉も、藤村も、鞘多も、小学校時代からの同級生だ。途中、泉は二人とは別々の高校に進学したが、大学入学の際に二人と偶然再会した。

藤村と泉の交際は、その頃から始まったのだ。

泉も、鞘多との付き合いは長かったため、彼がどういう人間かはよく知っているはずだった。いつも適当な事を言い、すぐ後には冗談で済みます。時折無茶なことをしては教師や保護者に迷惑をかける。

鞘多はそんな人間だった。そして、現在も。

そんな彼のことだから、どうせ今回のことも冗談で済ますつもりなんだろうと、藤村は高をくくっていたのだが、どうやら泉は藤村とは別の感想を抱いていたようだった。

『とにかく、私は鞘多君に協力するから。・・・藤村君はどうするの？』

『え・・・？ええ・・・と』

藤村は返答に困った。どうやら泉は本気で鞘多の手伝いのために、ビデオカメラの件を承諾したらしい。

『あ、もうこんな時間。じゃあ私お風呂入るから切るね』

『あ、ちよっと・・・』

『じゃねー』

『どうだった？俺の言ったこと、正しかっただろ？』

『ああ・・・本当だったよ。衝撃だ。いったいどんな方法で泉を丸め込んだんだ？』

『嫌な言い方だな。別に普通に頼み込んだだけさ』

鞘多に電話を掛け直した藤村は深いため息をついた。

まさかこんなことになるうとは。

『で、お前はどうすんだ？明日来るのか？』

『・・・行くよ』

『おお！マジか！』

『ああ、泉一人で行かせるわけにもいかないだろ？お前は安全だなんて言うけど、何が起るか分からないからな』

『そう言ってくれると思っただけ心の友よ！』

『なんだよそれ』

思わず藤村は苦笑する。

『いやあ、お前たちみたいな友達を持てて、俺は幸せ者だ』

『・・・なあ、鞘多』

藤村が心配した口調で尋ねる。

『何だ？』

『・・・お前、本気なのか？本気で銀行強盗なんてやって、囚人になるつもりなのか？』

『・・・本気だ』

低く、野太い声が携帯越しに聞こえてきた。

声のトーンからして、どうやら泉の言った通り、今回の鞘多の妄言は、妄言ではないように藤村にも聞こえた。

『なあ、良く考え直そうぜ？俺達はまだ18歳なんだぞ？まだ人生の半分も生きてないんだ。そんなに未来に悲觀的になる必要なんて・

・・・』

『お前も、泉と同じことをいうんだな』

鞘多が、どこか諦めたような声でクスツと笑った。

藤村は何も言い返さないでいた。

『心配してくれてありがとな。けど、もういいんだ。もう俺の残された道はこれしかないんだよ』

『そんなこと言うなって・・・悲しくなるじゃねえかよ』

藤村が、今にも泣きそうな声で言う。

きっと、藤村は本気で自分の身を心配しているのだらうと、鞘多は思った。

自分がいかに馬鹿なことをやろうとしているかは百も承知だ。

だからこそなのだ。

だからこそ、自分の親友である泉と藤村に、自分の『愚かな勇姿』を見届けてほしいと、鞘多は願ったのだ。

『・・・』

『・・・』

しばらくの沈黙の後、鞘多が努めて明るい声で話しを切りだした。

『まあ、そういうわけだ。俺の意思は変わらない。俺は晴れて、輝かしい未来に邁進するだけだ』

『鞘多・・・』

『あ、そうそう。集合時間なんだが、明日の昼12時に、第五銀行の駐車場所に集合な。あ、ビデオカメラも忘れるなよ。じゃあな』
というと、鞘多は一方的に電話切ってしまった。

藤村の部屋に静寂が広まった。

はあ、とため息をつく、藤村は携帯をテーブルに置き、ベッドに仰向けになった。

天井に備え付けてある蛍光灯が眩しい。

「ホント、馬鹿野郎だな、あいつ」

ポツリと独り言を呟いた後、気分を変えるのにシャワーでも浴びようかと、藤村は浴室へ向かった。

が、向かう途中で、ある事実が気がついた。

「・・・そういえば俺、ビデオカメラ持ってねえじゃん」

ベッドの脇に置いてあるアナログ時計は、23時を回ろうとしてい

た。

第一章：決行前夜（後書き）

願い事はプリズナーの二話目です。

銀行へ乗り込むところまで書こうと思ったのですが力尽きてしまいました・・・

なので、次の話で鞘多が銀行に突入します！

7月15日に文章の一部を改正しました。

決行は明日の「土曜日」「金曜日」

第二章：襲撃

翌朝

7月25日、金曜日、午前11時50分。

一昨日に梅雨明けした福島市内の空は快晴であり、一点の曇りもない。

藤村は鞘多から指定された通り、福島市内の第五銀行福島支店の脇にある駐車場に来ていた。

藤村は辺りをぐるりと見渡したが、どうやら、まだ泉と鞘多は来ていないようだった。

第五銀行は、福島県郡山市（おりやま）に本店を置く地方銀行である。

福島県におけるリーディングバンクとして強固な経営地盤を持ち、街の人達からは「第五（だいご）」の愛称で親しまれている、福島県内では非常に有名な銀行である。

鞘多が襲う予定のこの第五銀行福島支店は郡山の本店に次いで規模が大きく、二階建ての建物から成り、鞘多達の通う大学から北に歩いて10分の場所に位置するため、学生たちの利用率も非常に高い。現に、今も多くの学生が銀行内にせわしなく出入りしている。

藤村は、出来ることなら知り合いに会いたくはないと願っていたが、先ほどから多くの学生やOL風の女性、老人、主婦など、様々な職種の間が銀行内に入り込んでいるのを見て、すぐにその楽観的希望は頭から消え去った。

これだけ多くの人間が利用しているのだから、恐らくは人質になる予定の客の中には自分の知り合いも何人かはいるだろうと感じたか

らだ。

もし、人質の中に知り合いがいたらどうしようか。

『やあ、君も人質になっちゃったのかい？奇遇だね』なんて話しかけようかと思っただが、想像するところか可笑しさを感じたので、やめた。

まあ、出会ったら出会ったで、それとなくやり過ごせば大丈夫だろうと、藤村は腹をくくった。

うだるような暑さの中、藤村は泉と鞘多を待ち続け、15分ほど経過したところで泉がやってきた。

泉は、藤村を見つけると笑顔を浮かべて小走りで駆け寄ってくる。

彼女はお気に入りらしい淡い水色のワンピースを着こなし、右手には高校生時に使用していた学校指定の手提げ鞆が握られていた

肩まで届く滑らかな黒髪と、ワンピースの淡い水色のコントラストがなんとも絶妙であり、それが彼女の可愛らしさを一層引き立てていた。

現に、彼女とすれ違った男性の何人かは、彼女の可愛らしさに思わず後ろを振り返っていた。

藤村は、そんな彼女と付き合っていることにどこか優越感と、ある種の誇りを持っていた。

「ごめん！ちよつと化粧に時間が掛っちゃって・・・」

彼女はさういうと、暑さで紅潮した頬を冷ますために、左手でパタパタと顔を仰ぐ。

額には、じんわりと汗が滲み出ており、前髪の一部が額にべったりと張り付いていた。

その様子が何とも言えない色香を醸しだしており、思わず藤村はごくぐりと、と、唾を飲み込む。

「いや、いいよ。俺も今来たところだから」

藤村はそういうと彼女の鞆を代わりに持つ。鞆は意外と重く、中に入ってるのが何なのか藤村にすぐ検討がついた。

「これ、ビデオカメラが入ってるのか？」

「うん、ちゃんと充電してきたから電池切れは大丈夫。一応充電器も持ってきたよ」

「助かったよ。俺ビデオカメラ持ってなかったんだよな」

「え？持っていないのに来てくれたの？」

「そりゃあ・・・な」

自分の大切な彼女一人を危険な目に会わせるなど、藤村のプライドが許さなかった。

大体、鞘多は『安全だから』と言っていたが、彼がこれからやることはれっきとした犯罪なのだ。

警察だつてそれなりの対応してくるだろうし、人質になんらかの被害が及ばないということは保障されないと、藤村は考えていた。

「しっかし鞘多の奴、おせーな」

「そうだねえ・・・」

藤村の腕時計の針は、12時20分を過ぎていた。

「・・・まさか、またいつもの冗談だったのか？」

「うゝん・・・鞘多君本気だと思ったんだけどなあ。私の考えすぎだったのかな？」

「とりあえず、30分にもなつて来ないようだったら電話するか」

「そうだね・・・って、藤村君、あれ」

「ん？」

藤村が泉の指差した方向を見ると、道路を挟んだ向かい側の歩道を、怪しげな人物が歩いているのが目に映った。

体格から察するに男だろうか。

黒のフルフェイスヘルメットを被り、上下共にピッチリとした黒のライダースーツを身に纏い、緑色のバックパックを背負っていた。

男は、駐車場にいる藤村と泉の姿を見つけると、信号を渡って彼ら

の元へ走ってきた。

思わず身構える藤村と泉だったが、次に男の発した声に胸を撫で下ろした。

「よお！藤村、泉、来てくれてありがとな」

ヘルメット越しなので少しくぐもって聞こえるが、間違いなく鞘多の声だった。

「えーと・・・鞘多・・・？」

「おう！悪いな。少々準備に手間取っちゃった」

「いや、それはいいんだけど・・・なんだよその格好は。明らかに変質者じゃねえか」

「変質者とは失礼だな。これは俺が考えた『銀行強盗の正装』だ」
胸を張って、意気揚々と答える鞘多。しかし、藤村にとっては、彼の服装以上に彼が背負っている緑色の大きなバッグパックが気になっていた。

「そのバッグ。何が入ってるんだ？」

「ああ、これか？そうだな、段取りの説明ついでに教えておいてやるっ」

そういうと鞘多は地面にバッグを下し、ごそごそと中を漁り始めた。藤村が中を覗きこむと、ロープやら、ガムテープやら、ハサミやら、人質を拘束するための道具が入っていた。

だが、鞘多が用意したのはそれだけではなかった。

おもむろに鞘多がバッグから取り出したのは　一丁の回転式拳銃だった。

鉛色の銃身が太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。

しかし、それとは対照的に、拳銃を見た藤村と泉は血相を変えて咳いた。

「ちょ・・・お前なんて物を・・・」

「さ、鞘多君・・・」

恐怖に顔を染める二人を、きょとんとした表情で鞘多が見つめる。

「どうした二人とも。そんな怖い顔して・・・」

「どうしたもこうしたもあるか！なんて物を持ってきてるんだよお前！そんな物騒な物持ち出してくるなよ！てかなんでそんな物持ってたんだ！？」

大声でまくし立てる藤村を、泉が宥める。

「藤村君、落ち着いてよ・・・」

「そうだぞ藤村。こんな人通りの多い場所で大声を上げたら目立ちまうぞ。大丈夫だ。実弾は一発しか入ってないからな」

そついうと鞘多は、道行く人の群れに背を向けて、拳銃の弾倉部分を開けて中を見せた。

確かに、『レンコン』と呼ばれる6つの穴が空いてある弾倉の内、実弾が装填されているのは一か所だけだった。

「確かに一発だけだな・・・って！そういう問題じゃないんだよ！」
「まあまあ心配するな。これは威嚇用だ。人に向けて撃つわけじゃない」

「鞘多君、それ、どうやって手に入れたの？」

興味津津といった感じで泉が尋ねる。

「まあ・・・そういう『店』でな。手に入れたんだ。高かったんだぜ？これ」

「そもそもお前、威嚇用に持ってきたとか言うけどな、まともに撃てるのかよ？」

「ああ、ちよいと前に韓国に旅行した際に、射撃場で練習したんだ。あの国つてすげーのな。金払えば一般人でも実弾射撃を許可してくれるんだぜ？」

「ああ、そうなの」

藤村はあきれた声を出す一方、まさか鞘多がここまで準備してくるとは思わなかった。

どうやら、昨夜の泉の発言通り、鞘多は本気で銀行強盗をやる予定らしい。

「あ、ところでビデオカメラは持ってきたよな？」

「俺は持ってきてないぜ。持ってきたのは泉だけだ」

藤村は、泉から預かったバッグの中身を鞘多に見せる。

ごく普通のビデオカメラが入っていた。

「一応充電器も持ってきたから電池切れは心配してなくても大丈夫だよ」

「そうか。まあいいだろう。それじゃあ前置きが長くなったが、これからの段取りを説明させてもらうぞ」

そういうと、鞘多は拳銃をバッグパックの中に戻し、コホンと咳払いをして話し始めた。

「まず、最初にお前たち二人が銀行内に入ってから5分後に俺が中に入る。で、カウンターに近づいたところでさっきの拳銃を取り出して、俺がこう言うんだ。『全員、動くなッ!』ってな。で、威嚇の為に天井に向けて銃弾を発射する。その後、俺は行員に金をバッグに詰めるように指示して、入口のシャッターを行員に降ろさせて警察に連絡を入れるように指示する。その後、俺は警察に現金一億円を用意するように脅迫して、明日の午前10時に警察に投降する。その間、泉はビデオカメラで店内の様子を映してくれ。撮影のタイミングは俺が指示するからな」

「わかったわ」

「ずいぶんと細かいな」

「あ、分かっているとは思うが、銀行内では俺とお前たちは他人同士っていう設定だからな。くれぐれも名前で呼んだりするなよ」

「分かったよ・・・って・・・」

「ん？」

藤村がなんとなく鞘多の下半身に目をやると、なんと驚いたことに鞘多の股間の『アレ』がぷっくりと膨らんでいた。

「鞘多・・・お前・・・」

「鞘多君って・・・変態さんだったんだ・・・」

呆れた声で親友の顔を見つめる藤村。

少し照れたような顔をして、思わず目を背ける泉。

鞘多はそんな二人を見ると、慌てて訂正した。

「ちげーよ！これは生理現象なんかじゃねーよ！股間が膨らんでるのは『お守り』をここに張り付けてるからだよ！」

「・・・お守りだあ？」

「そう！お守りだ！昨日の夕方に百円ショップで購入してきたんだ。『どうか今回の銀行強盗が成功し、無事に刑務所に収監されますように』って願いを叶えるためにな！」

「・・・なんでわざわざ股間に張り付けるんだよ。このド変態」

「そこしか身につける場所がねーんだよ！ああ！もう！いいからさっさと銀行に入れよ！」

鞘多はしつしつと、野良犬を追い払うように右手を払った。

そんな鞘多を余所に、藤村と泉は第五銀行福島支店に入って行った。

中に入った二人は、入口の右側に設置されている休憩スペースの椅子に並んで座った。

藤村は、床にビデオカメラの入ったバッグを置くと、店内を見渡した。

休憩スペースの右側、つまりは、入口から見て奥の方にATM機が8台、綺麗に一直線に横に並んでいた。

8台というと中々の数だが、それでも窮屈さを感じさせないあたりが、この第五銀行福島支店の店内の大きさを物語っていた。

ATMを利用している客は8人程度であり、最も混んでいたのは、入口左側に設置されているカウンターだった。カウンターの前には青いふかふかの長椅子が湾曲型に5列配置されており、客が自分の順番を待っていた。

携帯電話をいじる学生。パンフレットに目を通すOL。雑誌を読む老人。おしゃべりに夢中な主婦。漫画を読む中学生。ざっと目を通すと20人近くはいた。

一方、行員の方は女性が多く。7つある窓口はどれも女性が担当していた。

そして、カウンターのすぐそばに置いてある整理番号を示す電光ランプは『113』を示している。この時間帯にしてはかなりの数だ。

「・・・鞘多の奴、大丈夫かな」

ぼそり、と藤村が呟くと、隣に座っていた泉が深刻な表情を浮かべて答えた。

「大丈夫じゃないかも」

「ま、マジ？」

「うん。だって・・・その・・・強盗する自分の姿に興奮して・・・その・・・だ、男性の『アレ』を膨らませている、へ、へん、たいさんだから・・・きつともう頭の方は大丈夫じゃないよ・・・」

顔を真っ赤に染め、もじもじした態度をとる泉。

どうやら彼女は、勘違いをしているようだった。

「いや・・・あれはあいつ曰く『お守り』を張り付けてるからで・・・まあ、頭がおかしいのは否定しないけど」

そついうと藤村はふと、壁に掛けてある時計を見る。

針は12時46分を指しており、二人が銀行に入ってから3分ほど経過していた。

「なあ、泉」

藤村がおもむろに口を開く。

「何？」

「なんで、鞘多の計画に協力しようと思ったんだ？」

「・・・藤村君、私思っただけど、友達が困っているときは協力してあげなきゃいけないと思うの」

「・・・泉？」

藤村は横に座る泉の声が、いつもとは少し違った「真剣味」を含んでいることに気がついた。

が、なぜ彼女がそこまで真剣な声を出して語っているのかは、藤村にはまだ分からなかった。

「友達が、自分の人生について真剣に悩んでいたらさ、手を差し伸べてあげることが大切だと思うの。それが本当の友達なんじゃない？私が鞘多君の計画に協力した理由はただそれだけだよ」

「・・・まあ、確かに・・・な・・・あ、あれ？」

「？どうしたの、藤村君」

「あれ、真田先輩じゃないか？」

「え？」

「ほら、あそこ」

藤村が指差した方向。つまりは、青い長椅子の一番後ろの列に、腰まで届く長い髪を茶色に染めた女性が座っていた。女性は、ストラップがこれでもかと山盛りに括りつけてあるピンク色の携帯をいじって、暇を弄んでいるようだった。

「あ・・・確かに」

「くっそお。やっぱり知り合いと出会っちゃったかあ・・・よりによつて真田先輩だなんて・・・」

「・・・」

「・・・どうした？泉」

「・・・私、あの人好きじゃない。てか嫌い」

「え？」

どこか刺々しさを持った泉の声に藤村は驚いた。

泉は、真田先輩を一直線に睨みつけていた。

と、その時、入口から黒いライダースーツに身を包み、緑色のバッグバックを背負った、フルフェイスヘルメットの男が店内に入ってきた。

鞘多だ。

鞘多がついに行動を起こしたのだ。

彼は店内に入ると、休憩スペースに座っていた藤村と泉を無視し、そのまま大股歩きでずかずかとカウンターに近づいていく。

ヘルメットをお取りになつて、整理券を取ってお待ちくださいと言う女性行員の声に耳を貸さず、そのまま彼は7つある窓口の内、もつとも入口に近い窓口の前にやつてくる。

店内に、奇妙な緊張感が走る。

窓口に座っていた女性行員は怪訝な顔を鞘多に向けるが、鞘多はそれを無視し、背負っていたバッグパックをカウンターに静かに下ろした。

そして、バッグから実にスムーズに、『それ』を取り出した。

「ひっ　　！」

女性行員が引きつった叫び声を上げる。

行員たちは身構え、客は突然の出来事にあっけにとられている。

「（鞘多・・・！）」

藤村は、休憩スペースから鞘多の姿を、じっと見つめていた。思わず、拳を握りしめていた。

彼の一挙手一投足を見逃さないでいた。

そして次の瞬間、拳銃を握った右手をゆっくりと天井に向け、鞘多が叫んだ。

『『全員、動くなッ！』』

だが、店内に轟いたのは、鞘多の声ではなかった
正確には、鞘多は叫んだ。『全員、動くなッ!』と。
しかし、彼のその声は、勇気を振り絞って出した彼の声は、彼の斜
め後ろから聞こえてきた『別の誰かの声』に被さって、掻き消され
てしまった。

「・・・え？」

鞘多は困惑した。

ヘルメット越しで客や行員からは分からないが、彼は困惑の表情を
浮かべていた。
なんだ今のは。

斜め後ろから聞こえてきた、俺と全く同じ台詞は
鞘多は、天井に拳銃を向けたまま、おそろおそろ、ゆっくりと声の
した方を振り向いた。
そこには

お面を被った三人の男性が立っていた。
両手に構えた猟銃の銃口を、鞘多に、向けたまま立っていた。

第三章：謎の三人組

『事実は小説より奇なり』という言葉がある。

この世界で起こる出来事の中には、まるで小説の世界から飛び出してきたかのような不思議な事がある。

通常、そういった言葉が似合う状況に、人はなかなか巡り合えない。巡り合いたいと思えば思うほど、だ。

しかし、藤村、泉、鞘多の三人は、幸か不幸か、今まさにその『不思議な事』に出くわしてしまっていた。

幸か不幸か。

銀行内に押し入ってきた仮面を被った三人の男たちは猟銃を鞘多に向けたまま、硬直していた。

鞘多も、一体これは何事か？と言った感じで三人の男たちから視線を外せずにいた。

二人は奇しくも、仮面越しにお互いの顔を見つめる結果となった。

時間にして2 3秒ほどだったが、その場に居合わせた人間たちからしてみれば、ずいぶん長い間、二人の睨みあいが続いているように感じられた。

と、その時だった。

三人組の内、長身の男の肩が微妙に動いたかと思った次の瞬間

店内に銃声が響いた

「あぐう!!?」

発射された銃弾は、鞘多の右膝を完璧に打ち抜いていた。

鞘多は、ぐらりと体格の良い体を揺らし、そのままバランスを崩して床に倒れこんだ。

撃ち抜かれた右膝からは赤黒い血がじんわりと流れ出し、スーツに大きな染みを作っている。

拳銃は鞘多の手を離れ、長椅子の下に滑り込んで姿を隠してしまった。

「さ・・・鞘多!!」

「鞘多君!!」

「あ・・・あう・・・う・・・撃たれた・・・撃たれちゃったよ
おお・・・い、いてえ・・・いてえ・・・」

涙声で鞘多が苦痛を訴える。

重傷を負った友人の元に駆け寄ろうと走り出した藤村と泉だったが、仮面の男達がそれを許さなかった。

鞘多を撃った男とはまた別の二人の男がそれぞれ、手に持っていた猟銃の銃口を二人のこめかみに突きつけたのだ。

騒ぎを聞きつけたのか、カウンターの脇にとりけてある階段を下つて二階から行員達が様子を見に来た。

が、血だらけで倒れている鞘多と、客と行員に猟銃を向けている三人組を見たたん、腰を抜かしたのだろうか、その場に力なく座りこんでしまった。

「動くな！動けば問答無用で射殺する！」

「くっ……！」

藤村に猟銃を突きつけていた男が叫んだ。

藤村は、下唇を思いつきり噛みしめ、自分に猟銃を突きつけている男をギロリと睨みつけた。

「ああ！？なんだこのガキ！なにガン飛ばしてんだよクソが！」

荒々しい声でそう叫ぶと、男は右足を高く上げ、藤村の腹を思いつき蹴りあげた。

「ぐふう！？」

勢いよく後ろに倒れこむ。

周りにいた客たちは、ひい、と蚊の泣くような泣き声を上げては、突き飛ばされた藤村を避けるように散らばっていった。

「藤村君！」

「ぐ……ゲホッ、ゲホゲホッ……さ、さやた……」

「まだ抵抗すんのかコラ！ああ！？」

藤村を蹴り飛ばした男は再び声を荒げ、藤村をもう一度蹴ろうと近寄る。

かなり気性の荒い人物のようだ。

「やめろ水見。まだ騒ぎを起こすんじゃない」

鞘多を撃った男が、静かに、しかしはつきりとした口調で同胞の暴力を諫める。

水見と呼ばれた男は、チツと舌打ちをすると、藤村に背を向けた。

一体、この男たちは何者なのか？

誰もが恐怖とともに、疑問を抱いていた。

と、その時、入口付近に倒れこんでいた、中学生とおぼしき三つ編みおさげの少女が、水見の目を盗んで脱兎のごとく外に走り出した。

「あ！おいてめえ！」

気配に気づいた水見が後を振り返った時には、もうすでに少女の姿

は銀行内ではなく、どこかへ走り去った後だった。

「くっ！」

「ほおつておけ。それよりも店内の制圧が先だ」

そついうと鞘多を撃った男は、階段に座りこんでしまっている行員達に近づいていき、一人の男性行員のこめかみに猟銃を突きつけた。「おい立て、今すぐにシャッターを降ろすんだ。それと、店内のカーテンもすべて閉じる。いいな。迅速にやれよ」

「い、一体あんた達は何なんだ！」

中年の男性行員が怯えきった表情で叫ぶ。

しかし、男はそれには答えない。

男の声は低く、凶暴さを言葉の端々に滲ませつつも、どこか冷静さを感じられ、水見とはまた対照的な人物のように藤村の目に映った。

「つべこべ言うな。このまま脳天をブチ抜かれないのか？」

「ひい・・・！わ、分かった！言うとおりにするから撃たないで・・・」

そついうと、中年の男性行員は何人かの行員とともに、入口に向かってシャッターを降ろし始めた。

その気になれば逃げ出せそうな気がしたが、先ほど頭に突きつけられた銃口の間接感を思い出すと、どうにも逃げる勇気が沸かなかつた。

5分ほどしてシャッターを完全に降ろし、緑色の鮮やかなカーテンも全て閉じられた。

これで、中の様子は外からは完全に見えなくなってしまった。

「水見。お前は二階に向かって残りの銀行員をここに連れてこい。一階の客と行員は俺と正信が見張ってる」

「ああ、分かったよ」

そついうと、水見は二階に上っていった。

泉に猟銃を突きつけている男・正信は三人の中では最も小柄な体躯をしていた。

「おい、この支店長はどいつだ？」

鞘多を撃った男は辺りを見渡して大声で叫んだ。

二階から、行員達の悲鳴と、水見の乱暴な大声が聞こえてくる。

それとは対照的に静まり返った一階。

その時、男の前に、一人の壮年男性がゆっくりと歩み出た。

「私が支店長だが？」

支店長らしき壮年男性は銀縁の丸眼鏡を掛け、白髪が混じった黒髪をワックスで後ろに撫でつけていた。

体はひよる長く、抵抗すればあつという間に組み伏せられてしまいそうな体つきであり、そんな彼の後姿が、ますます客達を不安にさせてしまっていた。

「あんたが支店長か？」

「そうだ。支店長の逢沢だ」あいざわ

「逢沢さん、この銀行の非常口の鍵はどこにある？」

「鍵か・・・ちよつと待っててくれ。私のデスクの中にある」

そういうと支店長は、カウンター内の一番左側に位置する自分のデスクの引き出しから、銀行内の最も奥に位置する非常口の鍵を取り出し、犯人の下に駆け寄る。

「これだ。これが非常口の鍵だ」

男は逢沢から鍵を受け取ると、その鍵をしげしげと眺め、顔を上げると、その鋭い眼光を逢沢に向ける。

「・・・おい」

「な・・・なんですか」

「これだけか？」

「は？これだけ・・・とは？」

逢沢の顔がわずかに引きつる。

その一瞬を、男は見逃さなかった。

「・・・とぼけるなよ逢沢さん。まだあるはずだろ、非常口のスペ

アキーが」

「あ・・・」

男は猟銃を逢沢に向けて構えた。支店長！と、叫ぶ声が聞こえる。

だが、男は意にも介さず、話を続けた。

「あんた、見た目の割にはなかなか胆力があるな。俺達の目を盗んで、スペアキーを使って非常口から脱出しようと思ったんだろ？」

「な、なんでスペアキーの存在を知ってるんだ！？あんた達、一体何が目的なんだ！」

震える声を絞って支店長が叫ぶ。

今にも泣きそうな声だった。

「それに答える必要はない。いいから早くスペアキーを持ってくるんだ！」

「わ、わかった。分かったから、行員と客には手を出さないでくれ」

「それは、あんたの行動次第だ。もし、鍵を取る振りをして妙なマネをしたら、ここにいる人間を全員射殺するからな」

「・・・」

逢沢は男の威圧感に押されてしまい、黙り込んでしまった。

そのまま、大人しく自分のデスクからスペアキーを取り出すと、男に手渡した。

男は、先ほど受け取った鍵とともに、自分の服の右ポケットの中に仕舞い込んだ。

これで、非常口からの脱出というわずかな希望も完全に消え去ってしまったのだ。

その時、階段から足音が聞こえてきた。

水見に脅され、人質となった行員たちの足音だった。

行員は全部で6名であり、皆怯えきった表情をしていた。

「高須、二階にいた人間はこれで全員だ」

階段から顔を覗かせた水見が大声で言う。

どうやら、鞘多を撃ち、支店長から鍵を受け取った男の名前は「高

須』と言っらしかった。

「よし、正信。行員と人質を長椅子に座らせる。水見、お前は客と行員の持ち物を預かれ。鞆はもちろん、ポケットの中まで調べるんだ・・・ああ、そうそう。さっきその男が持っていた拳銃が長椅子の下にあるんだ。今の内に回収しておけ」

「・・・分かったよ」

水見は、自分だけがこき使われることに対し、不満を持った顔をしていたが、すぐに長椅子の下から拳銃を取り出すと、弾奏を空け、中身を確かめた。

「なんじゃこりゃ？弾が一発しか入ってねえぞ？」

水見が不思議がるのも当然だ。

銀行を襲うのに、一発しか弾を詰め込めない人間が普通いるだろうか？

「うつ・・・」

鞘多がうめき声を上げる。

血の沁みは、先ほどより一回り大きくなっていた。

「おい！なんで一発しか弾詰め込んでねーんだよ！銀行強盗さん・・・

・よっ！」

「ぐふっ！」

「ほんとビビったぜ。店内に入ったら俺達以外にも拳銃を構えてるやつがいたんだからよ！」

「ぐっ・・・！」

水見が鞘多の傷口を思いつきり蹴り飛ばす。

フルフェイスヘルメットで隠れて見えないが、その声から苦悶の表情を浮かべているのは確かだった。

「さ・・・鞘多」

「鞘多君に乱暴しないでよ！」

「お・・・お前ら、銀行内に入ったら他人の振りをしろって言っただろ・・・」

鞘多が掠れ声で訴えた。

「あん？なんだお二人さん、知り合いかよ？」

「お・・・お前には関係ないだろ！銀行強盗！」

「はあ？」

藤村の怒気の混じった声に、水見が頓狂な声で答える。

「俺たちが銀行強盗？何言ってるんだよ、俺たちはなあ・・・」

「水見」

高須が静かに言葉を発する

「余計な事は言つな。いいから早く荷物を回収しろ」

「はいはい」

7月25日、午後1時27分。第五銀行福島支店は
三人の仮面を被った男たちによって占領された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8367u/>

願い事はプリズナー

2011年10月9日11時50分発行